

宗教的対立や紛争問題でばかり語られることの多い最近の中東ですが、政治的に緊張の続く世界にも古くから、 楽しい、或いは滑稽な話が沢山あります。

ここでは、レバノンの子供の本から、素朴な中東の人々の生活様式が窺われる三つの小話と、同じシリーズのアラビアンナイトから、日本ではあまり知られていない二つの話をご紹介したいと思います。

イラン細密画家、荒木郁代さんの美しく繊細な挿絵で お楽しみください。

目 次

- 1 ロバ引きのハバンナカ
- 2 ロバの知恵
- 3 正夢
- 4 禁じられた扉
- 5 床屋のシールと染師のキール

ロバ引きのハバンナカ

これはロバの背に荷を積んで運んでは駄賃を得ることを生業とする、ロバ引きの男の話。

昔あるところにハバンナカという、貧しいが大変呑気で善良な男がいた。おかみさんと二人、わずかな実入りで暮らしていた。ロバ引きのハバンナカにとって、ロバは生活の手段であり、財産のすべてでもあった。

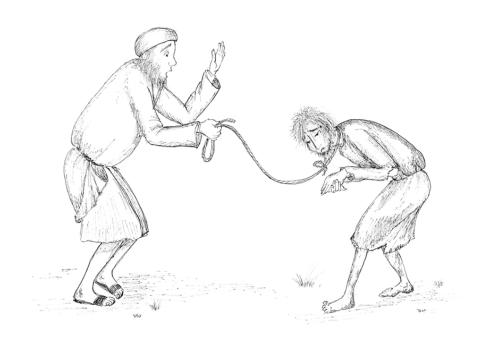
さて、その日も、ハバンナカはいつものように黙々と口バを引いて歩いていた。そして丁度、いいカモは来ないかと詐欺師の男二人が待ち伏せている所を通りかかったのである。男の一人がハバンナカの口バを見て、もう一方に耳打ちした。

"見ろ。よさそうなのが来たぞ、今日はあれを狙おうぜ。" すると相棒は言った。"そんなことできるのかい?持ち主が一緒だぞ。" 最初の男はニヤリとして答えた。"まあ、見ていろよ、ついてこい。"

二人の男たちはこっそりハバンナカの後をつけ始めた。そして全く人気のないところまで来ると、最初の男はハバンナカに気づかれぬように恐る恐る前に進んでロバに歩み寄った。次に、男はロバの頭から綱を外したかとおもうと、それを自分の首に巻いたのだ。ロバは相棒に任せて行かせてしまうと、今度はロバに替わって自分が一人でハバンナカに従った。哀れなハバンナカは未だ何も知らずに呑気に手綱を引いて歩いていた。

首に綱を巻いた男は、相棒とロバがすっかり見えなくなったのを確かめると、強く足踏みして、その場に立ち止まった。ハバンナカはロバを進ませるつもりで何度も手綱を強く引いてみたがロバは動こうとしない。言う事を聞かせてやろうと振り向いた途端、ハバンナカは、口をぽかんと開け目の玉が飛び出んばかりに驚いた。"一体全体おまえは誰だ?"

首輪を巻いた男ははじめ一言も発せずに哀れっぽく押し黙っていた。



それから同情を求めるように話し出した。

- "善良なご主人様、私はあなたのロバだった者でございます。俄かには信じられないかもしれませんが、少しお時間を頂ければ、どうしてこんな不思議なことになったかお聞かせしましょう。"
- "私は若い頃から親兄弟にも疎まれるほど恥さらしな人間でした。ある晩、柘榴でいっぱいの袋を抱えて家の脇をすり抜けて走ってくるやいなや、隣の主人が怒鳴り込んできました。柘榴の木は隣家のものだったからです。柘榴は知らない人に貰ったなどと言い張るのに、私の親もすっかり腹を立てました。そこで私は、自分は誓って正しい、これが嘘なら、アッラーが私を口バにでも変えるだろうよ、と悪態をついたのです。それがこの様ですよ。それ以来口バとなって何年もあなたに仕えて参りました。"
- "しかしながら、慈悲深い神は私の苦難ももう十分とお考えになったのでしょう、たった今、私を人間の姿に戻して下さったのです。"

お人好しのハバンナカはこの怪しげな話に疑いを挟むこともなく、男に近付くと、申し訳なさそうに首の綱を解き、自由にしてやった。

もと来た道をとぼとぼと戻る途中、ハバンナカは不思議な変身の話に深く心を奪われていた。"おかみさんはわかってくれるかなあ?それに、これからはロバもなくどうやって食べていったものだろう?"

ハバンナカがロバを連れずに帰ったのを見て、おかみさんは飛んで来た。 そこで、今日の不思議な出来事について一部始終を話して聞かせたのだが、おかみさんはさほど驚きもせず、むしろひどくショックを受けた夫を宥めようとした。

実際、おかみさんは、人間が犯した過ちのために馬やロバに姿を変えられ、重い荷を引いて償うという話を幾度となく聞いたことがあったのである。おかみさんはまた、ハバンナカから苛酷な扱いを受けたロバにもいたく同情した。

"お前さん、覚えておいでかい?あのロバを思いっきり蹴ったり叩いたりしたこともあったじゃないか。餌を忘れたことも一度や二度じゃなかったし、重い荷を無理やり積んで歩かせたもんだ。お前さんの手荒な扱いで、十分過ぎるほどの報いを受けたわけさね。ああ、どうか私どもに罰が当たりませんように。"

おかみさんに責め立てるように言われて、色々思い出せば思い出すほど、ハバンナカは気が滅入ってくるのだった。そして、気分が晴れないまま、仕事にも嫌気が差してきて、とうとう寝込んでしまった。

何日経ってもハバンナカが寝たきりなので、おかみさんも痺れをきらして苛立ちをぶつけてきた。

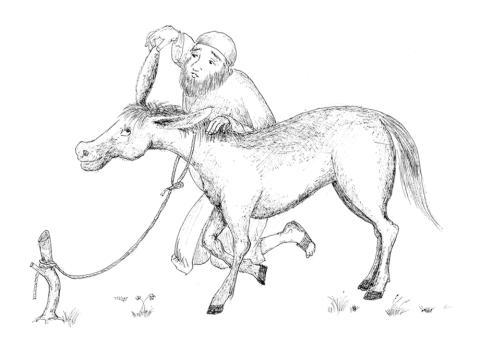
"昼日中から家に閉じこもっていても、何もいいことはないだろうに。起きて 先ず、お前さんに金を貸してくれそうな人を見つけ、もう一度ロバを手に入れ て働くしかないんじゃないのかい?"

これを聞いてハバンナカは渋々起き上がり、町に向かって出かけて行った。 ハバンナカが町に着いた頃、市場は人々で賑わい活気づいていた。横道に入れば野菜や果物、香料、巻いた布地や靴などを売る店がずらりと並んでいる。 そこを更に奥に進んで家畜の市までやって来た。 ロバの市には、大きさから年齢、顔立ちまで違う何頭ものロバが集まっていた。ハバンナカは自分の懐具合に見合い、また何とか重労働にも耐えられそうな一頭を選ぶつもりで品定めを始めた。

手頃な一頭を見つけて、それではこれに決めようと思ったその矢先、一人の男がハバンナカの横腹を押しのけていって叫んだ。

- "これは俺のロバだ!間違いなく俺のロバだぞ!"
- " どこだ?俺のロバを盗んで売ろうとしている奴は?そいつを打ち首にしてやるぞ!"

ハバンナカは騒ぎに巻き込まれないよう黙ってその場を離れかけた時、不意に目に止まったロバがあった。別の集団にいた一頭だったが、何だか自分が飼っていたロバにそっくりではないか。ああ!ハバンナカは驚きのあまり、自分の目を疑った。半信半疑、ハバンナカはロバの周りを回りながら、前から横からじっくり調べてみた。



額から鼻にかけての白い筋、胸の辺りの黒い斑点、鞍が当たって禿げた背の部分、垂れぎみの耳、見えない片目、間違いなかった。

これは俺のロバだ!絶対に俺のだ。

ハバンナカは少し後ろに下がり、いったいどうしたものかとうろたえて、頭を 掻いた。しかし、結局、ロバの傍にいくと、ほかの者に見られないように注意 深くたてがみに手を置き、ロバの耳に囁いた。

- "おまえはまた報いを受けることになってしまったのか!盗みをしたのかい、 それとも嘘をついたのかい?仕方ないやつだなあ。みんな自分の所為だぞ。あ んな目にあっておきながら、身に沁みて反省しなかったのが悪いんだ。"
- "だけど俺はもう、間違いを繰り返して嫌な思いをするのは懲り懲りだ。だからお前を買うわけにはいかないぞ。今度はほかの誰かと償えよ!"

ロバの知恵

ある富裕な主人と妻の営む農場には、沢山の家畜が飼われていたが、そのう ちロバと牛が一頭ずつ入った家畜小屋があった。

牛は、毎日畑に駆り出されて頚木に繋がれ、一日中重い犂を引かされていた。 ロバはといえば、農場を自由に動き回ってのんびり草を食み、さもなくば、 小屋の匂いのいい干草の上にゴロンと横になって伸びをしたりしていた。

ある日、主人が小屋の様子を見にやって来た時のこと。ロバと、一日の労働 を終え疲れ果てて戻ってきた牛の会話が主人の興味を引いた。

- この農場の主人は、動物の言葉を理解する能力を持っていたのである。 牛が口バに言った。
- "なあ、ロバさんよ、おまえさんは本当に幸運だぜ。

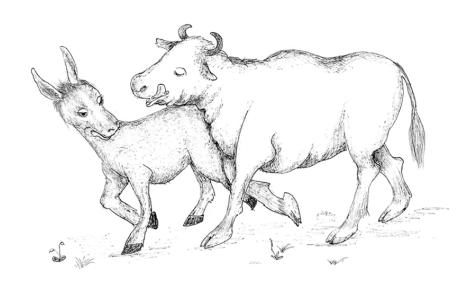
俺なんか、あの忌々しい犂を一日中引いて歩いてたまったものじゃない。 暑い夏はほこりまみれ、雨の降る冬は泥まみれだ。おまえさんなんか、昼日中、 気持ちのいい小屋で呑気に居眠りしてるっていうのにな。

人生これじゃあ、あんまりだ。"

それを聞いたロバは、仲間である牛の立場に同情し、少し牛に楽ができるような方法はないかと考えた。

主人が外でなおも耳をそばだてていると、ロバが言った。

"こうしたらどうかね?



先ずは餌を食べずにいて病気のふりをしてごらんよ。明日になって、畑で犂を引かされそうになったら地べたにしゃがみ込むんだ。動くときは、大儀そうにするといい。もし、おまえさんの足を無理やり立たせようとしたら、もう一度へたり込むのさ。小屋に戻ったらまた、餌は気が進まないというふりを続けるんだ。かいば桶の中に、どんな旨そうなものが入っていたとしてもね。こんな風にしばらくやってごらんよ。人生楽しくなること請け合いさ。"その晩から早速、ロバの助言に従って実行してみることにした。そして、餌の方を見ることもせず、ひっそりと小屋の奥にうずくまっていた。次の朝、農夫がやってきて、いつものように牛を畑に連れて行こうとしたが、何か様子がおかしかった。牛が餌に全く手をつけていないのを見ると心配にな

り、主人のところに飛んでいって報告した。

農夫の話を聞き終えると、主人は頷いて言った。

"そうか。それなら牛は休ませておき、代わりにロバを連れて行って使うこと だな。勿論、ロバは体も小さいが、時間が勿体ない。待っているわけにもいか んからな。ロバに犂をつけて何とか働かせてみてくれ。"

農夫は、主人が牛のことを心配していないのを訝しく思い、また畑を耕すのにロバを使うというのも納得がいかなかったが、言われたとおりロバを連れて出かけた。

こうしてロバは、牛の代わりに重い犂を引いて行きつ戻りつ、照りつける陽射しの中で一日中働いた。へとへとになって動きが鈍くなると、農夫はロバの 尻を太い棒で叩いた。

重労働が限界に達して、痛みも感じないほどになった頃、やっと日は傾き、涼しい風が吹き始めた。農夫と共に農場にたどり着く頃には、すっかり夕闇が迫っていた。

ロバがよろけながら小屋に入ってくるのを見て、牛の方はそれとわかる楽しげな表情で友達を出迎えて言った。

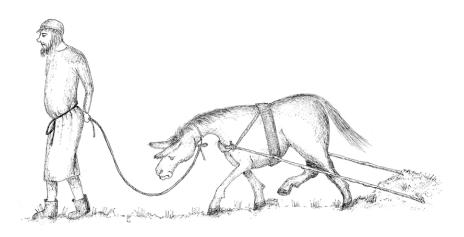
"ロバさんよ、我が一日は、全くすばらしいものだったよ。お腹が空くのは確かだが、何日かすれば、それも慣れるだろう。実際、小屋で何もせずにのらくらしているなら、餌もそんなに沢山いるわけじゃない。ところで、おまえさんの方はどうだったかね?"

ロバはそれには一言も答えず、不機嫌そうに小屋の奥に入って行き、片隅に もぐり込んだ。そして、睡魔に襲われながら、心の中で呟いた。

"俺はなんて浅はかだったんだ。こんな馬鹿なことはもうこりごりだ。"

次の日、いつもと同様、まだ夜も明けやらぬうちに農夫はやって来た。牛の様子を観察し、餌に手をつけていないのを見ると、主人に知らせに行った。戻って来ると、昨日と同じようにロバを連れ出して犂を繋いだ。

苛酷な労働の間、ロバの頭の中を駆け巡っていたのは、唯ひとつの思いだった。 "このままじゃ駄目だ。何とかしなくちゃ、何とかしなくちゃ。"



夕刻、農場に帰る頃は疲れて切って、お腹はペコペコ、泥にまみれ、痣までできる始末であったが、今日は、またとない解決策を思いつき、心は弾んでいた。"これならきっとうまくいくぞ。"

友達のロバが帰って来た時、牛は満足げに欠伸をしながら言った。

" あっという間に一日が終わったよ。今日も本当にいい日だった。おまえさんの方はどうだったかい?"

ロバは素気なく答えた。"俺の方も悪くはなかったよ。" それから、真面目な顔になって続けた。

"ところで、わかっていると思うが、本当の友達っていうのは自分より友達のことを心配するものさ。だから言うけどね。ここの主人が手伝いの男に、おまえさんの病気のことで話しているのを聞いたよ。このまま病気だと、おまえさんをおいておく必要はないとね。

明日になっても回復しないようなら、病から楽にしてやった方がいいから肉屋に連れて行くそうだ。"

丁度その時、後ろの方で、まぐさを飼葉桶の中に入れる時の、バケツのガラガラいう音がした。音のする方を向くと、主人が小屋の入り口に立っていた。 "おまえさんたち、夕ご飯だぞ。食べたら、お休み。" 次の朝、主人と妻は、手伝いの男と一緒に小屋までやってきた。 牛は態度もよく、元気そうだった。筋肉は引き締まり、尻尾を振って、歩みは 力強く弾んでいた。飼葉桶の中は、一すじの藁をも残さず、きれいになってい た。

農場の主人と妻は、牛が、手伝いの男の後を小走りで追いながら畑の仕事に 戻って行くのを見て、クスクス笑った。

牛は、少しばつが悪そうに頬を赤らめていた。

正夢

随分昔のこと、平和の都バグダッドにアブドッラーという裕福な商人が住んでいた。アブドッラーは、金持ちが手に入れたいと願うものを何でも持っていた。

大きな庭に囲まれた美しい屋敷、噴水が付いていていつも水の溢れている大理石の鉢、とびきり豪華な絨毯や敷物、金銀の大皿、仕えてくれる沢山の召使たち。居心地のいい暮らしに欠けるものは何もなかった。

しかし時として、労せずに巨万の富を手に入れることがあるのと同様、一瞬にして、それらを失うということも起こる。商人アブドッラーにも、遂に最後のディナール札を使う日が来た。財産はすべて失われ、借金ばかりが膨らんでいることを知った。

その結果、破産という思いもかけぬ事態となり、住み慣れた家で生活するのに必要なもの以外、持っていた全ての物を売りさばくことを余儀なくされた。 哀れにもアブドッラーは、他の貧しい者たちと同様、飢えずにすむだけの仕事 を求めてさ迷うことになった。ある時は人夫となって道を作るための石を砕き、 ある時は市場で商人に雇われて豆の袋を担いだ。

ある晩、重労働を終え、町をぬけて家に帰る途中、市場の外れの草むらに、 疲れて眠り込んでしまった。そして不思議な夢を見た。夢の中に男が現れ、熱 心に言った。



"カイロに行きなさい。カイロには莫大な富がお前を待っている。すぐに出かけて行って、宝の分け前を手に入れて来るのだよ。"

アブドッラーは、夢を信じなければいけないような奇妙な感覚に急き立てられて目を覚ました。だが、バグダッドから千マイルも離れたカイロの、一体どこへ行けというのだろう。乗っていく物もなければ金もない!

結局、自分の足でオアシスを横切り砂漠を歩いてカイロまで旅をしようと決意した。

三ヶ月の苦難の旅であったが、この苦難はバグダッドで石割りをしていた時よりはましだ、と自分に言い聞かせて耐えた。そして遂に、アブドッラーはカイロまでやって来た。

もう夜も更けていて、泊まる場所を選んでもいられず、裁判所の建物の前に自 分がいるのを知ると、その庭の片隅に横になり、忽ち深い眠りについた。

偶然その夜、盗人の一味が近くの家を襲うために、同じ裁判所の庭に集まっていた。

犯行時、盗人が窓の蝶番を外す物音にその家の住人が気付いて助けを求めた。 まもなく、犯行現場に、警察の署長が部下の者を連れて到着したが、盗人た ちはとうに逃げてしまっており、そこにいたアブドッラーが盗人の一味ではな いかと疑われた。

運の悪いアブドッラーは目を擦り擦り起き上がって困惑するばかりだったが、 やがて自分の置かれた立場がわかりかけてきた。

署長が、怪しい人間を取り押さえるよう命じると、とりわけ体の大きい男どもがアブドッラーの周りに進み寄り、彼をうつ伏せにして床に押し付けた。そして脇腹で縛り上げると、牢に引きずって行った。

アブドッラーは、疲れと突然の不運に打ちひしがれたまま、暗い不潔な牢の中で三日間を過ごした。こんな扱いを受けるほど、自分がどんな悪いことをしたというのか?!

牢の外では、誰かの大きな話し声と足音が聞こえ、鉄格子の窓を通って一筋の光が差し込む中、アブドッラーは絶望的になって、自分を痛めつけるように言った。

"夢を信じるなんて、何というオメデタイ奴だったんだ、オレは! たいそうなご褒美というのはこういうことだったのか?

三ヶ月、やっとの思いで砂漠を渡ってきた挙句の果てが、この始末か?誰にも看取られずにここで死ねばいいさ!"

絶望に押しつぶされそうになっていた時、丁度、人が来て、アブドッラーは 署長の前へ連れて行かれた。

署長はアブドッラーに、名前、住所、事件現場にいた理由などを尋ねた。

"名前はアブドッラーと申します。バグダッドからやって参りました。" アブドッラーがそこまで答えると、署長は遮って言った。

"つまり、ここで悪事をはたらくために、そんな遠い所からわざわざやって来たというのか?わが国の法律は、今度のようなことに対して、決して甘くはないぞ。その方の立場を申し開きできるならしてみよ。"

そこでアブドッラーは、不思議な夢から始まる出来事について語り始めた。



署長は、鋭い目つきで観察していたが、この男は嘘はついていない、と見て 取った。

少々、お人好しで世間知らずのようだが、盗人ではないと。

聞き終わると、署長は笑って言った。

- "要するに、富の分け前を探し当てるという夢の実現を信じて、はるばるカイロまでやって来たというわけかい?それでどうだったかね?"
- "あなたの部下に取り押さえられ、牢の中で三日間を過ごすという運命が、 わたしに与えられた分け前でした。"

これを聞くと、署長は腹を抱えて笑いころげた。それからアブドッラーに言った。

"おまえさんも単純なやつだなあ。それで思い出したが、わたしも実は、三日三晩続けて夢を見た。夢の中で男が言うんだ。バグダッドのラサーファという一角にある家のことだが、そこには白とグレーの大理石のホールがあって、その奥には大きな鉢がある。間隔を開けては、その鉢から水が溢れてくるというんじゃよ。こんなふうにな・・・・"

そう言いながら、署長は、水の流れるさまを身振り手振りで表現した。

" 男は夢に出てくる度に、その鉢の下に宝があると念を押す。そして早くバグ ダッドに取りに行け、と急き立てるんじゃ。だが、わたしがそれで、のこのこ バグダッドまで行くと思うかね?"

署長は自分の机の方にかがみながら続けた。

" そんなことするわけないだろう? どこへも行きはしないよ。 おまえさんほど 単純じゃないからな。おまえさんの方はまだ、宝探しが諦めきれんようだがね。"

署長は玄関までアブドッラーを送りながら、小遣いの入った袋を渡し、親しみを込めて言った。"これはバグダッドに帰る足しにしてくれ。もう、金輪際、夢なんか信じるんじゃないぞ。気をつけてな。"

自由の身になって警察署を出るアブドッラーに、署長の笑い声が玄関ホール いっぱいに響くのが聞こえた。署長の話を聞いたアブドッラーは、はやる気持 ちを抑えるように帰りを急いだ。署長の夢は、自分の夢よりもっと不思議に思 われた。

なぜなら、署長が語った建物や宝が埋められているという鉢のあたりの様子は、 バグダッドにある自分の家のことにぴったりだったから!

再び砂漠を横切り、長く苦しい旅を終えて、アブドッラーは故郷バグダッドに戻ってきた。そして真っ直ぐラサーファ地区の我が家に向かった。

家のホールの鉢のところへ行くと、その下を掘り始めた。

何とそこには署長の話のごとく、宝がぎっしり収まっているではないか! 夢は正夢だった。慈悲深いアッラーは、多くの苦難を乗り越えたアブドッラー を、惜しみない富を以って祝福されたのでした。

禁じられた扉

その昔、ファイハー (薫り高き街) の名で親しまれたダマスカスに、イブラヒームという男の子がいた。イブラヒームの父は裕福かつ経験に富んだ商人で、大変値の張る珍しい布地を扱っていた。

市場にある父の店には、身分の高い人々や金持ちが出入りして、絹や金の刺 繍の入った布を求めていくのだった。

イブラヒームは、しばしば父の店を覗きに行っては、貴族や大臣、政治家などがコーヒーを飲みながら、気に入った布地を選ぶのを見ていた。

豊かで恵まれた環境の中、両親や二人の姉たちの愛情に包まれて、イブラヒームは何不自由なく陽気に成長していった。

時が流れて、イブラヒームが成年に達する頃、識見に富む父親は、日頃の息子の振る舞いに向こう見ずな面があるのに気付いており、それが何より心配のたねだった。

更に年は過ぎ、年老いた父親は死期の迫った床の中で、息子のことを案じていた。

イブラヒームに母親や姉たちのことを任せることは不安だったので、自分の遺産は彼女たちに取り分けた後、残りをイブラヒームのものとした。



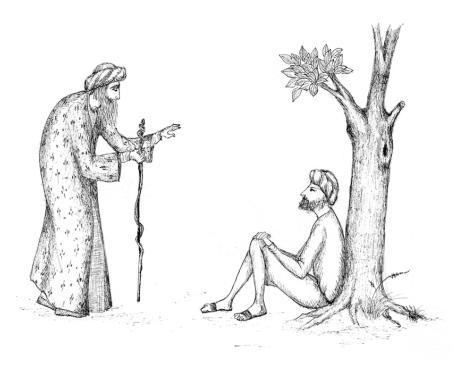
イブラヒームは莫大な財産を相続すると、贅沢な暮らしへと傾いていった。屋 敷を構えて豪華な絨毯を敷き詰め、宝石を散りばめた壷や金銀の皿のために散 財し、音楽とあらゆる娯楽に満ちた酒宴には、毎晩多くの仲間を招いた。

気が付いた時、イブラヒームは父から譲り受けた富をすっかり失っていたのだった。

仕方なく、自慢の敷物を一枚また一枚と売り、高価な壷を売り、金銀の皿を 売って、最後には屋敷も売り払った。いよいよ売るものもなくなって、仕事を 探しに出た。

とはいうものの、都合よくいい仕事が見つかるわけはなく、父の店のあった市場に行って荷物担ぎでもするしかなかった。仕事はきつく、稼ぎは僅かだった。

焼けつくような暑い日、イブラヒームは涼を求めて木陰に座った。その日は朝からずっとオリーブの壷を運んで、疲れ切っていた。



その時、どこからともなく、気品のある老人が近付いてきてイブラヒームに 話しかけた。

イブラヒームに仕事を提供したいというのだった。

"わたしの屋敷には、身分の確かな十人の男が住んでおるが、皆、年老いており、身の回りの世話をしてくれるものがなく困っている。給料は満足のいくように支払うし、食事と衣服もこちらもちでいかがかな。"

この結構な申し出を断る理由は何もなかった。

イブラヒームはすぐさま立ち上がり、ありがたく受けて言った。

"ご主人さま、ただ今から、お仕え申します。"

老人はイブラヒームに自分と一緒に来るよう促し、二人は狭く込み合った通りをいくつも抜け、奥まって人目に付かない門までやって来た。門を潜ると、二人はいつのまにか美しい邸宅の中にいた。

中庭中央には、澄んだ水をたたえた池があって水面が煌めき、オレンジの花からは甘い香りが漂っていた。

庭に囲まれた建物には威厳があり、彫刻をした柱や細かい装飾を施したアーチが配置されていた。

老人は、心地良く風の通る広いホールにイブラヒームを呼び入れた。

- "ここでの仕事について説明しよう。"
- "わたしはこの家に、他の十人の年老いた男たちと暮らしている。早速、仕事を始めてもらいたいが、最初に一つだけ約束して欲しいことがあるのだ。"

イブラヒームは聞いた。

- "何でしょう、それは?"
- "この家では何故私たちが皆ふさぎこんでいるのか訊かない、と約束してもらいたい。何故、笑ったり、ほほえんだりしないのか、時として涙ぐんでさえいるのか、決して尋ねてはならないが、よいかな?"

奇妙な約束だと思いながらも、イブラヒームは承知した。



イブラヒームに与えられた仕事は骨の折れることではなかった。建物や庭の手入れの他は、買い物をして食事の準備をすることだったが、陰気な老人たちは、食欲もなく、要求する食べ物はわずかだった。訪れる来客もなかった。 イブラヒームはそれなりの衣服を与えられ、給料も十分過ぎるほどで、何不自由なく、自分の家に居るように暮らすことができた。 そして時折心の中で思った。

"この家はなんて美しいのだろう。それにわたしの子供の頃の家に似ている。 わたしは幸運だ。"

しかし、一日中ため息をついたり呻いたり涙を浮かべる老人たちを全く元気付けることができず、イブラヒームはそれが残念でしかたなかった。

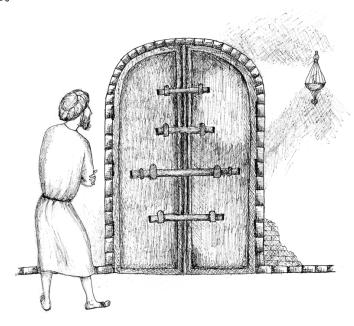
"いったい何がそんなに悲しいのですか?"と口を滑らしそうになっては、最初の約束を思い出して口を噤むのだった。

月日は流れ、老人たちは一人また一人と神に召されて逝った。遂には、市場 で出会ってイブラヒームをこの家に連れてきたあの老人だけになってしまった。 その老人もやがて重い病の床に付き、イブラヒームは老人を看取るために何 日もベッドのそばに座って付き添った。

老人は言った。

"わたしが死んだら、この家はそなたのものじゃよ。"

イブラヒームは感謝した。" ありがとうございます。あなたのご恩は忘れません。"



"でも、一つだけ、わたしには不思議で仕方ないことがあります。これほどあなた方を嘆き悲しませたものとはいったい何だったのでございましょうか?"

老人は弱々しく言った。

" 倅よ、言えることは一つじゃ。向こうにあるあの木の扉だけは絶対に開ける ではないぞ。"

イブラヒームは、老人が指差した扉に目をやった。

そして再び視線を戻した時、老人は息を引き取っていた。

イブラヒームは何週間か一人になった屋敷に住んでいたが、老人の最後の言葉が気になって仕方なかった。

扉の前に立って、その向こうには何があるのだろうと考えた。

四つの閂はすっかり錆び付いて、扉が長い間、開けられていないのは明らかだった。

見捨てられ、忘れられたまま何年もたった建物に通じる扉かもしれなかった。 イブラヒームは禁じられた扉のことで頭がいっぱいになった。

そのうち、寝ても覚めても扉のことを考えると心が休まらなくなった。

"扉を開けて、わたしは不幸になるかもしれない。だが、このまま開けないでいても、気持ちが安らぐことはないだろう。"

こう自分に言い聞かせて、扉を開けることを決意した。

長い鉄の棒を持ってくると、しっかり固定された門をこじ開けようとした。 思い切り力を込めて、やっとのことで四つの門を外した。

次に扉を強く押すと、目の前は、暗く長い、洞穴のような通路だった。

イブラヒームは胸いっぱいに大きく息を吸い込むと、暗闇の中を手探りで進んでいった。通路が余りに狭く低い所では、腹ばいになった。地面は湿って冷たかった。

そして遂に、通路の先にぼんやり光が見え、気がつくと、イブラヒームは川 岸に来ていた。へとへとに疲れ、着ていたものは泥だらけだった。その場に座 り込むと、これからどうしたものか途方に暮れた。

その時、急に強い風が吹き、辺りが一瞬翳ったかと思うと、馬ほどもある巨大な鷲が、空中から、イブラヒームに襲い掛かろうとしていた。そして、黄色い大きな鉤爪でイブラヒームをつかむと大空に舞い上がった。

鷲はそのまま、川や湖を越え、丘や森の上を空高く飛んだ。海が近くなってくると、鷲は高度を下げ始めた。大きな翼は、紺碧の海の上で、黒いテントを広げたように見えるのだった。

遠い水平線の彼方に、緑の小さな点のようなものが見えた時、イブラヒームは、"島だな。"と呟いた。

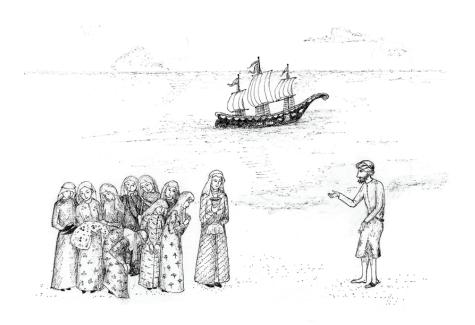


鷲は飛行を続けていたが、島まで来るとイブラヒームを地面に投げ降ろし、す ぐさま空に舞い戻って、海の向こうに消えて行った。

イブラヒームは草むらに横たわったまま、あまりの恐ろしさに動く力もなかった。そして、ぐったり疲れて眠ってしまった。

何時間眠っただろうか。やっと目を覚ましたイブラヒームは、起き上がると、自分の周りを見渡した。花が咲き乱れ、実をつけた木もあった。白い砂浜も見えた。砂浜の方に下っていくと、遠くに船のようなものが見えたが、近付いて来ると、それはまさしく船に違いなかった。船は艶やかな黒檀と象牙の作り、金箔で飾られ、その帆は純白で汚れ一つなかった。

船が浜辺に着くと、十人の若い女たちが降りてきた。これまで見たこともないような美しい女たちだった。イブラヒームは戸惑いながら立ち上がり、彼女らが歩いて来るのを見ていると、女たちはイブラヒームの前まで来て慎み深く頭を下げて言った。



"私たちの王さま、ようこそお出で下さいました。女王さまがお待ちかねでございます。"

女たちは、イブラヒームに美しい絹の衣服と汲んだばかりの水を満たした金の杯を差し出した。それから、イブラヒームを船まで誘い、深く青い海へと漕ぎ出した。

朝に夕に船を進める間、女たちは心地良い調べを奏で、また優しく心に染み 入る歌を歌った。その上、食べたこともないようなご馳走や薫り高い果物で、 イブラヒームをもてなした。

夜は、数え切れない美しい星で飾られた丸天井のような空を見上げながら、 敷物の上に横たわり、波の音に誘われて夢を見るのだった。

遂に、船が陸地近くまで来た時、黒い砂浜の広がっているのが見えた。 しかし傍に来れば、それは砂浜ではなく、鎧を纏った騎士たちであった。

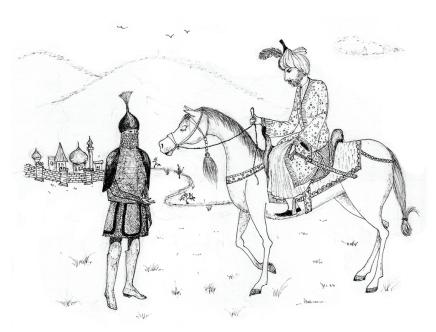
次の瞬間、歓声が上がった。"王さまの到着だ!王さま万歳!王さま万歳!" 船から降りると、鞍に象牙と金をあしらった白い馬に乗せられ、歌声と太鼓 の鳴り響く広い通りを進んでいった。 イブラヒームの後ろには、騎士たちが徒歩で従い、通りには何百何千もの旗が 風に翻っていた。

騎士の一団は、緑の谷間まで来て止まった。その辺りは、せせらぎと滝、木々には色とりどりの鳥たちが群がり、彼方には、高い城壁と塔、円屋根の集まる大きな街を見渡すことができた。そして、街の方角から、輝く鎧で身を固めた若者が率いる、別の騎士の一団が現れた。その一団は近くまで来ると、若い隊長が馬から降り、イブラヒームの方に歩いてきた。双方共に頭を下げ挨拶を交わした後、隊長が言った。

"ようこそお出で下さいました。あなたは私どもの大切な客人です。"

それから二人は連れ立って街の方へと馬を進め、大きな城門の一つを抜けると、 街中の人々が歓呼して迎えた。 花や旗で飾られた通りを過ぎ、 若い隊長はイブ ラヒームを城へと案内した。

大理石の階段を上った先には、やはり大理石や水晶がふんだんに使われた立派 な広間があった。



広間の奥には、見事な刺繍のカーテンで仕切られた高座があり、その高座を勧められると、イブラヒームは広間に集まった人々の方を向いて座った。 若い隊長はイブラヒームの横に立ち、ゆっくりと自分のヘルメットを外した。 何とそれは、輝くばかりに美しい乙女であった。

"わたくしは、この国の女王です。そしてもし、わたくしと結婚して下さるなら、あなたが王です。"

イブラヒームは思いも寄らない申し出にどぎまぎしながら頭を下げると、 "はい"と小さく呟いた。

イブラヒームの同意を得て、女王は大臣や高官たちを招集したが、驚くべき ことに、それらの人々は皆、女であった。女王は打ち明けて言った。

"この国に住んでいるのは、女ばかりでございます。あなたが今日ご覧になった騎士たちの中にも一人として男はおりません。"

イブラヒームの驚きと戸惑いをよそに、女王は続けた。

"心配などしないで一緒に楽しく暮らしましょう。この国の富はすべて、あなたのものでございます。欲しいものは何でも手に入れることができるのですわ。 その代わり、一つだけ約束して下さいましね。"

"何でしょうか、それは?" イブラヒームが尋ねると、 女王は、部屋の反対側を指 差してきっぱりと言った。 "どんなことがあっても決 して、あの扉を開けてはな りません。"

イブラヒームが頷いたのを 見て、女王は促した。

" さあ、こちらにいらっしゃいまし! 結婚披露宴の準備をいたしましょう。"



披露宴が始まると、人々は国のあちこちから、一番上等の装いでお祝いに駆けつけた。

慶びの宴は三週間にもおよび、夜昼かまわず祭りなど催される中、王と王妃は 人々の喝采と色とりどりの花、そして華やかな音楽に包まれていた。

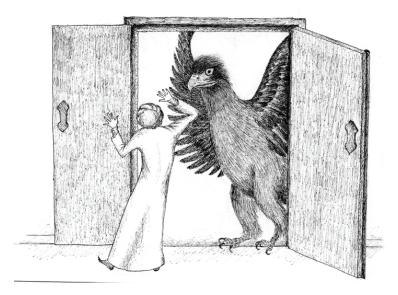
イブラヒームは最初、自分がこの国でたった一人の男であるという現実を喜べないでいたが、王妃を深く愛するようになって、次第に不安は消えていった。

いつしか数年の月日が流れていた。

ある日、イブラヒームは、初めて城に来た日の禁じられた扉の約束事を思い出し、扉の前まで行ってみた。扉は四つの鉄の門でしっかり閉じられていた。結局、王妃の警告が頭に浮かび、諦めて扉から離れた。

しかし一旦気になり始めると、イブラヒームは扉のことを忘れることができなくなった。"多分、扉の向こうには見たことも聞いたこともないようなすばらしい宝物があるにちがいない。"などと考えて落ち着かなかった。だが、何とか開けることは思いとどまった。

暫くは我慢していたが、再び好奇心が頭をもたげてきて、もはや抑えることができなくなっていた。遂に、閂を外し、扉を開けた。



その途端、目の前に、イブラヒームを島へと運んだ、あの巨大な鷲が現れた。 そして驚くほどの速さで飛び掛かかって、大きな鉤爪でイブラヒームを体ごと つかんだ。

その時、誰かが叫ぶのを聞いた。

"イブラヒームよ、おまえは与えられた幸せに満足するということを知らない な!"

それから鷲は、イブラヒームをつかんだまま大空に舞い上がった。

鷲は、山を越え、丘を越え、青い海を渡って飛んでいったが、イブラヒームの目は涙でかすみ何も見えなかった。

鷲はイブラヒームを運んだまま何時間も空高く飛んでいたが、急に降りてくると、洞窟の入り口に近い川べりにイブラヒームを投げ降ろした。入り口の向こうは、悲しみの老人の家へと続く通路だった。しかし、王妃のもとに戻れるかもしれないという淡い期待を抱きながら、イブラヒームは何日か川べりに座って待ってみた。それは叶わぬことと分かって、漸く諦めて立ち上がり、暗い通路へと入っていった。

そして、のろのろと這いながら、再び老人の家に帰り 着いたのだった。

それからというもの、 イプラヒームは、笑うこと も、人と付き合うこともな く、一生ふさぎこんだまま だった。



床屋のシールと染師のキール

地中海を臨むエジプトの港町アレクサンドリアに、 アブー・シールという 名の床屋とアブー・キールという染物を職とする二人の男が隣り合わせで店を 持っていました。

シールは正直者で、いつも客に満足してもらえる仕事をしたいと一生懸命で した。客には礼儀正しく、髭を剃り髪を切るにも清潔を心がけ、きびきびと働 きました。

一方のキールは邪で信頼のおけない人間でした。評判の悪いキールの店にやって来るのは、何も知らない初めての客くらいで、まともな人は遠のきました。

キールは、客が染めて欲しい布や服を持ってきた時、先に代金を請求するのが常でした。

そして、代金を払った客が立ち去るやいなや、客の布や服を持って市場に行き、 それらを売って遊興に使ってしまうのです。数日後、客が染め上がっているは ずの品を取りに来ると、"布は盗まれてしまった、運が悪かったのであって自分 に弁償の責任はない"などと言い張るのでした。

争いごとを好まないおとなしい人たちはアッラーに訴えるだけで不本意ながらも口をつぐみ諦めましたが、中には怒り出す人もいて、そういう時は激しい口論になりました。

そしてその後は二度とキールに染物を頼もうとはしませんでした。キールは腹を立てた客の目を避けるために、隣のシールの店で髭など剃って貰いながら自分の店を見張っていて、見知らぬ者や騙されやすそうな者を客として選ぶのでした。

ところがある時、キールから損害を被った者が有力者で、キールの行為に対する不満を警察署に訴え出たのです。すぐさま、署長の部下の者がキールの店にやって来ましたが、キールはいつものように隣の店にいて、自分の散髪の順番を待つようなふりをしていました。署長は、キールの店に誰もいないので、直ちに店を閉めて入り口を板で塞いでしまうように指示し、更に戸口に張り紙で警告しました。

"店主へ。この店に入る場合はまず警察署に出頭するように。"

さて、キールはシールの店でぼやいていました。自分が店の主人だと名乗り 出る勇気もなかったし、第一、警察に行ったらどうなるかを考えれば、それは できません。

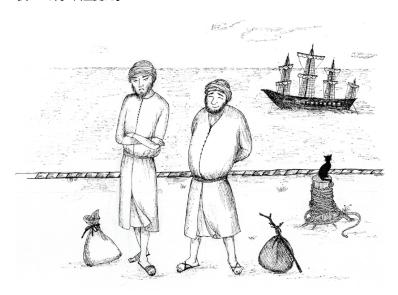
最後の客が立ち去った後、片付けて帰り支度を始めたシールを見て、キールは 言いました。

"俺を運の悪いやつだと思わないかい?誰かが、俺の客の品物を毎日のように盗んで行って困っていたのに、今日は警察からのお達しで、営業停止だとさ。 こうなったらどこか他の場所でやっていくしかないよ。"

シールはこの隣人の行為について知らないわけではなかったし、正直で誠実な振る舞いということについて、キールには問題があるのではとも思っていました。

けれども、旅に出ることはシール自身の頭にもありました。

"実は私もこの土地にあきあきしていたんだよ。このアレクサンドリアではわたしだって床屋として随分経験を積んだ方だが、それでも稼ぎは自分がやっと食べて行く程度だ。



他の土地で働くのも悪くないな。一緒に旅に出るとするか!二人で稼いで分け 合いながら暮らせば何とかなるだろう。"

話がまとまって、シールとキールは次の日この町から旅立つことに決めました。

シールは借りていた自分の店を閉じると鍵を大家に返しましたが、キールの店は警察に押さえられたままでした。二人はそれぞれ荷物を手にして、アレクサンドリアを発つその日最初の船に間に合うよう港へ急ぎました。港で船を待つ間、二人の話は、お互い仕事ができない時が長引いても、一方が稼いだものは必ず分け合おうということに終始しました。

そして船出の時間になると、他の50人程の乗客と一緒に、海の向こうの目的 地を目指して乗り込みました。

急に思い立ったことなので、二人とも、数週間かかる船旅の支度は不十分で、 食べ物や飲み物の準備は何日分でもありません。しかしうまい具合に、乗客の 中に床屋はシールだけだったので、早速、皆の散髪を買って出ました。髪を切った代金の代わりに食べ物を分けてくれるように頼むと、彼らも喜んで応じて くれました。

仕事のないキールは何もせず、一日中、ごろごろと寝ていましたが、友達が一生懸命働いて得たものは、同意の上だと言わんばかりに遠慮なく取って食べました。キールの食欲は恐るべきもので、シールが貰ってきたパン、チーズ、オリーブ、甘いお菓子、時にはカバーブや船長のご馳走など、まるで一週間も飲まず食わずであったかのようにガツガツと食べました。

二十日間の航海を終え、船は遂に大きな港に着きました。

シールもキールも陸に上がり町をぶらぶらした後、沢山の旅人が集まっている 宿屋に部屋を借りました。宿泊客のほとんどは旅の商人で、商いの品や家畜、 家族を連れた者もいました。

シールはこの町でも早速、床屋を始め、朝早く起きて仕事に出かけると暗くなるまで働きました。

一方のキールは、船酔いからまだ回復しないなどと仮病を使って寝ていました。

それでいて、シールが食べ物を持ち帰ると キールは起き上がって食欲旺盛に 食べ、おおかたを平らげてしまうと再び横になるのでした。

シールは真面目に働き節約も心がけたおかげで、まさかの時に備えて貯蓄もできました。

或る日、シールは友人キールに言いました。

"おまえさんも少し町の中を歩いてきたらどうかい。その方が体にもいいし元気も出てくると思うがね。ここは仕事も色々あるから見てくるといいよ。少しずつ体も良くなってくるだろうからな。一緒になって頑張れば、俺たちだって成功すると思うさ。"

しかしながらキールは相変わらずベッドに横になったままで、"そんなふうに言われると余計に気が滅入ってしまうよ、あーあ。"などと、大儀そうにため息をつくのでした。

ところが或る日、シールが病に襲われ何日も床に臥すことになってしまいま した。

高い熱に苦しみ、眠りも途切れ途切れになりました。この状況にキールも気まずさを感じ、また空腹にも耐えられなくなり、何か食べる物はないかと起き上がって探しました。食べ物は見つかりませんでしたが、ディルハム札数枚の入った財布が出てきました。

友人シールが苦しんで寝ているのを尻目に、キールは財布を持って忍び足で部屋の外に出ると鍵を掛けました。そして町に行くと市場を歩き回り、贅沢な食事をし、立派な服を買って、財布の中身を使い果たしてしまいました。

ところで、町では染物を生業とするキールの目に奇妙に映ったことがありました。この町ではなぜか人々の衣服は白と青の二色だけなのです。道行く人に尋ねてみると、この町の染物職人は青以外の色は使わないという答えでした。 そこでキールは染物の店に行き、名乗ってから言いました。

"私は染物を専門にしている者だ。もし金を払ってくれるなら、どんな色の作り方でも教えてやろう。赤、黄、緑、オレンジ。染めたい色、何でもだ。" すると、店の職人は答えました。 "我々の染物組合には40人ほど職人がいるがね、皆、青しか使わんよ。誰も 変わった色など必要ないのさ。生憎だね。"

キールは他の店を順に回って同じように申し出たのですが、答えは決まって いました。

"我々が使うのは青一色だ。それ以外は望まんな。"

彼らの答えに腹を立てたキールは、城へ行き王に面会を求めました。

面会が許されると、ここでも自分を紹介しながら意図するところを話し始めま した。

"栄えある王よ。私は遠方から参りました染物職人でございます。

私はあらゆる色に布地を染めることを得意と致します。しかし、こちらの国の 染師たちは、染物は青一色、と譲りません。どうか美しい色を広めるためにお 力添え下さい。王様の民の召す物を鮮やかにしたいのです。"

王はキールの申し出を歓迎して言いました。

"わかった。費用や召使など必要なものは心配しないでよいぞ。その方が選んだ場所に、その方の思うような染物店を作るがよい。"

キールは街中のいい場所を選び、堂々たる店を構えたので、人々は珍しがってやって来ました。自分の衣服を野の草のような緑に染めたいという者もいれば、明るい赤がいい、黄や深紅、ばら色、真っ黒など、好みは人それぞれです。お陰で店は繁盛し、仕事は忙しくなりました。

キールは、店の中央、贅沢な敷物をあしらった長椅子に、あたかも王のよう に座って、指示や命令を出しました。

染物組合の一行も、染めの秘訣について教えを請いにやって来ましたが、前に彼らがキールに冷淡だったごとく、キールも彼らを冷淡に扱いました。キールはこんな仕打ちに快感を覚える人間でした。

しかしながら、色々なことが次々起こっている間、自分の友人シールがどう しているかとか、約束したように自分の稼ぎを分け与えようなどとはこれっぽっちも考えることはなかったのです。

或いはまた少なくとも、シールの容態がその後どうなったか尋ねてみるということにさえ思い至りませんでした。

その哀れなシールは、あれから何日も寝付いたままでした。

宿の主人ははじめ、二人の宿泊客の姿が見えないし、部屋の戸口も鍵が掛かっていたので、宿賃を払わずに逃げてしまったのかもしれないと考えました。 仕方なく合鍵を使って部屋に入った途端、やせ衰え生気の失せたシールを見つけて飛び上がらんばかりに驚きました。シールは病と飢えで見る影もないほど弱っていました。

主人はシールの立場に同情し、金銭の見返りなど望まずに看病しました。キールが病気の友人を置き去りにしただけでなく、立ち去る前に、シールの財布まで持ち出したことを見抜いたからでした。

それでもシールは、友人キールの行方が知れないことを庇って言いました。 "何か事件にでも巻き込まれて困っているのかもしれない。私に連絡がないの もそのせいだろう。"

二ヶ月ほどすると、シールはまた仕事に戻れるくらいに回復しました。 そこで、久しぶりに、商売道具を携えて市場の方に出かけて行きました。働けば、自分の食べる分、それから宿の主人に、宿賃の支払いと世話になったお礼の分くらいは稼げるでしょう。途中、シールは大きな店の前に人だかりができているのを目にしました。豪華で色鮮やかな布地も見えます。何だろう、と店に近付き、そこに自分の友人キールを見つけた時の驚きといったらありませんでした。立派な店の中央の豪華な長椅子に誇らしげに座り、大勢の熱心な客を相手に横柄な熊度で交渉していたのです。

シールは友人が成功しているのを知って喜ばしく思いながら、心の中で呟き ました。

"これだけ大きな店を持って繁盛しているのだから、さぞかし忙しいにちがいない。 友人のわたしに連絡もできないわけだ。"

シールは古き友人キールの方ににこにこしながら歩み寄りました。ところが キール、シールを見ると腹立たしげに言いました。

"性悪の盗人め!またこの店に盗みにきたのか?一度や二度なら大目に見るが、 三度目ともなったら容赦はしないぞ!"

そしてキールは使用人の方を向いて叫びました。

"この憎たらしい盗人を外へ放り出せ!もう二度と来ないように、懲らしめて やれ!"

気の毒にもシールは無理やり通りに引っ張り出され、酷い目に遭ったのでした。

シールは午後になって意識を取り戻したものの、気分は落ち込み、おまけに 頭のてっぺんからつま先までほこりまみれになっていました。そこで、すぐに も風呂に入ってさっぱりしたい、風呂に浸かれば痛みも和らぐだろうと考えま した。



通りがかりの男に、風呂がどこにあるのか尋ねてみると、答えは意外なものでした。

[&]quot;ふろ?それはなんだね?"

"風呂とは、湯、もしくは水の浴槽に入って体を洗うところです。体はきれいになりますし、気分もよくなるのですよ。また熱い蒸気の部屋で寛ぐこともできるのです。"

すると男は言いました。

"それなら海に行けばいいさ。ここでは皆、海に行って体を洗うよ。王様だってね。"

シールは、おかしなことだ、こんな大きな町にどうして風呂もないのだろうと思い、次の日、王に面会を申し出て、公衆浴場の建設を提案しようと考えました。

王は快くシールを迎え、シールが、風呂とその利点について述べるのを聴きました。

"王様、大まかに申して、風呂に入るというのは人間にとって大変大事なことでございます。ですから、大きな町には必ず、公衆浴場というものがあるのでございますよ。"

王は頷きました。

"なるほどな。それでは、この街の自慢となるような風呂をつくるがよい。直ちに取りかかれよ。入り用なもの何でも申し出るがよいぞ。"

こうして、準備を整え、数週間後には大浴場を開いたのです。

人々は三々五々やって来て、これまで知らなかった風呂というもので寛ぎ、誰もが満足して帰りました。また、シールは自分の作った大浴場を王のものとして、貧しい者、富める者、すべての人々に開放しました。料金については入浴客の支払い能力に応じて払うように求めたので、シールは人々の信頼を集めるようになりました。客の中には高額を支払ってくれる者もいたのですが、筆頭は毎週訪れる王でした。

大浴場のことは広く知られるようになりました。その噂はキールの耳にも届き、自分の友人シールが営んでいるとはつゆ知らず出かけたのですが、風呂までの距離を自分はロバに乗り、召使たちに付き添わせるという大袈裟な行列を作って行きました。

大浴場では、受付ホールの中央で客に応対しているシールを見て、どんなに 驚いたことでしょう! しかし、キールはシールに近付くと非難するような調子で言いました。

" やあやあ、親愛なる友人ではないか!?おまえは、この哀れなキールを忘れていたようだな。"

ぬけぬけと言うので、シールはキールの店で侮辱されたり殴られたりした嫌 な再会の話を持ち出すと、キールは少し狼狽して言いました。

"そんなこと覚えておらん。どうもよくわからんが、おまえを盗人と思ったのは、たぶん病気の後、顔つきがかわったからだろう。どうしておまえは自分がシールだと言わなかったんだ?俺が勘違いをしていることを教えなかったおまえが悪かったのだ。"

シールは誰に対しても恨みを持ったりする人間ではなかったので、キールを 個室に案内すると進んで世話をしました。石鹸と水でキールの背中を流したり、 香りの良い油を使ってマッサージしたり、蒸し風呂や水風呂の後には温かいタ オルを差し出したりしたのです。

それから二人の話は自分 たちの成功のことになり、 自分たちの考えや計画を援 助してくれた王の寛大さや 懐の深さを語り合いました。 ところがキールは、自分と 同様シールが王に好意を持 ち、また親しい様子でもあ るのを不愉快に思い、古く からの友人を陥れてやろう と考え始めたのです。



そこでキールは愛想笑いをしながら言いました。

"なあ、シールよ。ここを申し分なく立派な風呂とするには、まだ足りないものがあるぞ。松の実油入りレモンクリームさ。アレクサンドリアの風呂には必ずあって、使うと爽やかな気分になったものだ。風呂の後、あのクリームでマッサージして差し上げたら、王さまだってきっと満足すると思うがね。"

キールの助言にシールも納得して言いました。

"なるほど、それはいい考えだ。早速取り寄せて、王さまが次にお出ましになった時、お勧めしてみよう。"

風呂を終えるとすぐに、キールは王の城へ急ぎました。そして、面会を許されると、息も切れ切れに話し始めたのです。

"王様、新しくできた大浴場の主人のことで大変なお知らせに参りました。 私は、あの男を古くから存じておりますが、こちらの街には、あなた様の敵国 の使いとしてやって来ているのです。あの男に対する王様のせっかくの好意や 信頼も無駄となりましょう。

わたしは、あの男といろいろ話すうちに、あなた様の殺害の計画を突き止め たのでございます。"

"して、それは、どのような手口なのじゃ?"

キールは待ってました、とばかりに答えました。

"次に大浴場にお出ましになった時、あの男は体にいいと言って、松の実油のクリームであなた様をマッサージすると申し出るでしょう。それは、本当は大変恐ろしい毒で、体にいいなどとはとんでもございません。マッサージの後、三日もすると毒は肌を通って心臓に達します。こうなったら一巻の終わりでございます。その時までには、裏切り者は逃げて、海岸から数マイルも離れているでしょう。ですから、手遅れにならないうちに、正義の力で立ち向かって下さいませ。"

キールの警告を聞いて王は不安になりました。

こうして次の週、王が大浴場を訪れた時、シールが、爽快な気分にさせると いうクリームを持ち出して来ると、王は直ちにシールを捕らえるように命じた のです。

牢に放り込まれたシールに溺死の刑が言い渡され、石灰と一緒にシールは大きな袋に入れられて、王の船の船長が沖まで運ぶことになりました。

その後、城の見晴台からの王の執行の合図に従って、船長が中身の入った袋 を海中に投げ入れるという手筈になっていました。 時に、船長はシールの風呂に足繁く通う客の一人で、シールが心の正しく誠実な人柄であることを知っていました。それで、シールが逮捕され処罰が決まった時、シールは不運にも卑劣な陰謀の犠牲になっているにちがいない、と直感したのです。

船長は、逃がして近くの島に身を隠させる以外よい方法はあるまいと思い、 シールを小舟に乗せ別れを告げた時、漁に使う網を渡しました。

"これで魚を獲って下さい。王様の料理に使う魚を獲るのも私の大事な仕事です。魚を捕まえてくれれば、あなたも私を手助けしてくれたことになるのです。"

さて、船長は王の指示に従い、合図を待つために、沖へと船を漕ぎ出しました。船長の足元には、石灰と石ころを詰めた袋がころがっています。

しばらくして、王は見晴台から船の方を見渡し、持ち上げていた手をすばや く下げて合図しました。即座に船長が袋を落とすと、袋は勢いよく水しぶきを あげて海に沈んでいきました。

ところで、その直前、王が合図を送った時のことですが、船長の目を引いた ものがありました。王の手の動きに従って、何かきらきらした小さな物が海の 中に落ちていったのです。

同じ頃、シールは島の周りの浅瀬で魚を捕まえようと、網を手に動き回っていました。アッラーの加護により、うまい具合にたくさん魚が網にかかったのですが、同時に、シールは空腹を感じて呟きました。

"これだけあれば、王様の台所に運んでも余りがあるな。どれ、ひとつ焼いて、 船長が来たら一緒に食べるとするか。"

シールは小さなナイフを取り出し、最初の魚を切り開いて腹の中をきれいにしていた時、魚の食道のあたりに大きな金の指輪が光っているのに気がつきました。シールはその指輪を自分の人差し指にはめてから、魚を焼く火をおこしにかかりました。アッラーのお恵みによって与えられたものに感謝しながら。

丁度その時、男が二人、舟に乗ってやって来て岸近くに錨を下ろしました。 二人は、王様の台所に持って行く魚を取りに来たことを知らせ、一人が"船長はどこだ?"と叫びました。 それで、シールが指輪をした手を上げて、二人のずっと後方、海の上を進んで来る船長の船を指差した時です。指輪から鋭い光線が走って二人の男に当たったと思うと、二人とも地面に倒れました。

船長が島に上がってくると、そこには取り乱したシールがおり、足元には王 様の召使二人が息を引き取っていました。シールが今起きたばかりの出来事を 伝えると、船長はすぐに、その一部始終を悟りました。

王が袋を沈める合図を出した時、光りながら落ちた物は、王の指から外れた 指輪だったのです。そして偶然、その指輪を飲み込んだ魚がシールの網にかか ったというわけでした。

船長の説明によれば、この指輪には魔法の力があり、もし、それをはめたまま生ある者を指差すと、何の悪意がなくとも直ちに命が失われてしまうというのです。

船長は続けました。

- "私たちの王様は、この指輪で敵を征圧し、国の平和を守っているのです。"
- "そのように大切なものなら、直ぐ返しに参りましょう。"



シールが王の目の前に現れると、王は非常に驚き、また怒りを顕わにしました。もし、シールが自分の指にはまっている指輪に注意を向けようとしなかったら、すぐにもシールと船長の逮捕を命ずるところでした。王は指輪を見ると、恐ろしさに顔色を変え、沈黙しました。

シールは、何故自分がこれを持つに至ったかを語った後、躊躇わずに指輪を 王に返して言いました。

"王様、私は、あなた様に敵意を持たれるようなどんな悪いことをしたと申されるのでしょう?それを知りたいだけでございます。"

王がキールの忠告について語ったことから、キールの悪巧みが明らかになりました。

即刻、王はキールを捕らえてくるよう使いを送りました。

王や家来の前でキールの陰謀が暴かれ、裁さは、もし船長が助けなかったら 命を失うところであったシールと同じ、溺死の刑が下されました。

それを聞いてシールは、王に嘆願しました。

"慈悲深い王様、私は、この男の行為を許したいと思います。どうか、この男に情けをかけて下さいませ。もし、どうしても法の裁きが必要だと申されるなら、せめて死刑だけは免れますよう。"

しかし、王はシールの嘆願を退けました。

"そなたの心情は察するが、このような冷酷なふるまいは私としては許すわけにはいかない。私だけでなく、誰もがそう考えるであろう。"

こうして結局、キールは自分の友を欺いた報いを受けたのでした。

一方、王はシールの忠誠に対し、褒美や気に入りの家来まで与えて報おうとしました。しかし、シールは既に相応の富は蓄えてあり、また故郷を恋しく思う気持ちに逆らえず、アレクサンドリアに帰る決意を固めていました。王は地位をも与えて引き止めようとしましたが、シールの考えは変わりません。そこで王は、高価な土産物と船、それにシールを恙無く故郷に送り届けるためのえり抜きの水夫を手配しました。

故郷アレクサンドリアに無事帰ったシールは、その後何不自由なく幸せに暮らしたのでした。

* * *

さて、そののち、アレクサンドリアの入り江に、石灰と小石の入った袋が打ち上げられているのが見つかりました。袋の中身から、人々はシールとキールの話について知るところとなり、以来、その入り江は、"アブー・キール湾"と呼ばれるようになったということです。



ここで取り上げた5話は全て、ベイルートの出版社、マクタバ・レバノンのファラーシャ文庫シリーズから

"3つの小さな話"(文 アブドゥッラー・アブー・ミドハット1990)

"禁じられた扉"(文 ナディャー・ダヤーブ 1987)

"アブー・シールとアブー・キール" (文 アブドゥッラー・アブー・ミドハット1991) の翻訳である。

"3つの小さな話"に、ファラーシャ文庫の解説は無いのだが、"ロバ引きのハバンナカ"のパターンは、広く中東に共通する類型のようで、講談社の青い鳥文庫 "アラビア物語" に収められている "ファルークのロバ" (川真田純子訳 1989) とも類似の作品である。 また、ポーランド生まれの絵本作家ユリ・シュルヴィッツ (1935ー)に "たからもの" (安藤紀子訳 偕成社 2006)という作品があるが、これは、細部は全く異なるものの、その構成は "正夢" に酷似している。このシュルヴィッツが一時期、イスラエルで学んでいることや、ロバ引きの話の "ハバンナカ" がシリア風の名前であることを考え合わせると、これら3つの小話はレヴァント地方の民話であろうかとも推測したくなる。

アラビアン・ナイトについては、既に多くの立派な邦訳が存在するが、本格的なアラビア語の古典は、時に冗長で繰り返しも多い。その点、ファラーシャ文庫の2話は子供向けの再話である為、 簡潔でわかり易い。これを機会に、今一度、アラビアン・ナイトの世界に遊んでみてはいかがでしょうか?



Middle East within Asia
Booklet Series

No. 5(2010.8)

 $\Diamond \Diamond \Diamond$

編業・プロジェクト事務局

〒186-8601 国立市中2-1 ー橋大学・東キャンパス マーキュリータワー 5 階3507 室

URL: http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/

研究代表者:加藤博 一橋大学大学院経済学研究科教授

印刷: ゴト―印刷